

江戸の町作りと人々の生活

藤沢市生涯学習大学人材バンク 講師

江の島・藤沢ガイドクラブ

2023 年 10 月 新藤 正則

序論

徳川家康が江戸に入府した頃（1590 年）は、太田道灌が築いたと言われている江戸城の前は葦が茂った湿地帯で、現在の日比谷公園近辺まで入り江が入り込んでいた。

人家も約 100 件程度の静かな漁村であったと伝わっている。家康は入府以来、湿地帯・入り江等の埋め立て、上水網の構築、街道の整備、町割り等の大開拓を行って現在の日本の首都に繋がる当時の世界一の大都市を築きあげた。

この江戸の町は、開拓に携わる土木建築に関わる男性職人、参勤交代で諸大名に伴って江戸に勤番する単身赴任の武士、そしてこれらの男性を相手にして商売をする商人等による男性社会であった。さらに、当時は自給自足の社会であったが、この江戸の町の住民の殆どは、第一次生産活動に携わらない消費者集団であった。

江戸の近郊の村々では、この消費者集団を対象に食材を始めとして諸々の物の集中大量生産が始まる。又、この大都市の住居は木造建築で火災には弱く、人が密集した江戸の町は再三大火災と地震に見舞われた。これらの災害の影響か、今日稼いだ金は今日使ってしまうと言う言わば「江戸っ子は宵越しの金は持たぬ」という独特の気風も生まれた。

「日本食は？」と問われたら、殆どの人は寿司・天麩羅・蕎麦・蒲焼・鋤焼き等を思い浮かべることでしょう。これらの日本食と言われる物の殆どが単身の男性を相手にした屋台による外食産業から始まっている。

世襲制の武士は、約 260 年の間 殆ど昇給が無いが、庶民は働けば働く程 豊になっていった。余裕が出来ると自ずと余暇を楽しむ風潮も生まれ、花見・花火・芝居・歌舞伎見物・寺社参りの旅（旅行）・ペットの飼育等の娯楽も生まれてくる。

これらの江戸の庶民の生活が浮世絵として描かれ、この浮世絵が江戸僅番の武士の江戸土産として地方へも伝わって日本文化として成熟していくのである。

1. 江戸の町作り

(1) 江戸の開拓

(a) 土木工事（埋立・堀割・架橋・上水道設置・道路（街道）整備・・・）

日比谷入江の埋め立て、神田上水・玉川上水等の上水網の整備、運河・橋の構築整備、江戸城の建設と堀割。

(b) 日本橋を起点とする主要街道の整備（街道並木・一里塚・宿場等）

京・大坂と江戸を結ぶ東海道は、一番交通量が多く、各宿場は多いに発展した。東海道の宿場の平均旅籠数は 55 件にのぼる。

(c) 海上航路の開発、飛脚制度の構築

(2) 町人住居・大名屋敷・武家屋敷・江戸城築城・寺社（名所）等の町割り

武家地≒70%、町人地≒20%、寺社地≒10%

(3) 頻繁に発生する火災・地震での再々の建築工事

- (4) 工事・建築職人（男性）と参勤交代に随行する単身の勤番武士による男社会
1750 年頃の江戸の人口は約 110 万人と推定される。

町人≒50 万人、武士≒55 万人、神官・僧侶≒5 万人

当時のロンドン≒85 万人、パリ≒55 万人

1800 年頃の日本の人口は約 3,200 万人であった。

農民≒2,670 万人（84%）、武士≒230 万人（7%）、町人≒200 万人（6%）、

公家・僧侶・非人≒100 万人

- (5) 寺社の整備、名所作り、庶民のための公園作り

(a) 江戸の町の裏鬼門とするため日比谷にあった増上寺（浄土宗）を芝に移転（1598 年）

(b) 家康を東照大権現とする日光東照宮を造営（1617 年）

(c) 浅草寺にも東照宮を造営（1618 年）、寛永寺建立までは表鬼門守護とする

(d) 上野に寛永寺（天台宗）を創建（1625 年）、江戸の表鬼門守護とする

比叡山・延暦寺⇔東叡山・寛永寺

琵琶湖⇔不忍池、竹生島⇔弁天島、宝厳寺⇔弁天堂

(e) 上野に清水観音堂造営、大仏建立（1631 年）

(f) 浅草に三十三間堂造営（1642 年）

(g) 各大家の菩提寺も江戸に作られたので寺の多い町となる

(h) 八代将軍・吉宗は庶民の憩いの場として公園を設置、上野・飛鳥山・御殿山・隅田川
堤防等に桜を植栽。以後 川の堤防に桜が植えられるようになる。

2. 長屋暮らしの共同生活の中で新たな気風と文化が生まれる

- (a) 殆どの町人は、屋根・壁共に板作りの長屋住まいであった。

長屋の広さは間口＝1.5 間（2.7m）、奥行＝2 間（3.6m）で 3 坪、

或いは間口＝1.5 間（2.7m）、奥行＝3 間（5.4m）の 4.5 坪程度であった。

火災・地震が多いので安普請の家が多かった。

- (b) 井戸、トイレ、物干し、芥溜（ゴミ箱）等は共同で、ゴミは 10 日に一度 船で永代
島に運ばれて埋め立てられた。

長屋には風呂は無く銭湯が行水。リサイクル社会で捨てる物は殆ど無い。

- (c) 表通りには、間口＝2 間（3.6m）、奥行＝4.5 間（8m）の 9 坪程度の商店があった。

- (d) 大名・旗本・御家人等の武士は、家禄に応じて拝領地を与えられていた。

10 万石＝7,000 坪、5 万石＝5,000 坪、1 万石＝2,500 坪、5 千石＝2,000 坪

1 千石＝900 坪、500 石＝750 坪、200 石＝600 坪、100 石＝300 坪

これらの拝領地には、家臣・使用人の家も建てられていた。

家禄に応じて門構えが定められていた（表札は無い）。

- (e) 大名屋敷は、長屋塀で囲まれていて、参勤交代に伴って上府した僅番武士は、この
長屋に単身で住んでいた。勤番武士は基本的には自炊生活であった。

- (f) 江戸の住民の殆どが地方出身者（共通語が江戸弁→標準語化）。

参勤交代で出府する武士は更に田舎者。武士を武士とも思わない気風。

- (g) 運命共同体、皆兄弟、思いやり、お互いさま、道徳律、同義感で社会秩序を保つ。

「男らしさ、さわやかさが不可欠」、「江戸っ子の面汚しが一番恐ろしい」、

「けちは禁物」、火事が多い（宵越しの金は持たぬ）。

3. 庶民の職業

- (a) 江戸の町には乞食は殆ど居なかった（幕末には乞食も増えてきた）。
- (b) 江戸の町では絶えず土木建築作業が行われていた。
火事・地震災害の復旧、大名の配置換え、庶民の住居位置替え等
- (c) 土木建築職人、あらゆる物の棒手売（天秤棒一本での商売）、屋台、リサイクル業、竹売り、松売り、医者、・・・・・・（何でも商売になる）
- (d) 上方の商人も江戸に出て来て、呉服商や両替商を始め、現在の百貨店へと発展した。
三越（伊勢の酒屋・質屋）、東急（京都の材木商）、高島屋（近江の米穀商）、大丸（京都の呉服・両替商）、松坂屋（尾張の呉服商）
- (e) 旗本・御家人は将軍家の為の役職があったが、平和な江戸時代においては、約4割が特段の職務は無く暇な生活であった。

4. 江戸の生活

- (a) 江戸時代には、キリシタン禁制を名目にした「宗門人別改帳」によって、旦那寺によって戸籍が管理されていた。
- (b) 仕事は、明け方に始まり夕暮れには終わると言う早寝・早起き形であった。夜も燈明代の節約からオシャベリをするか寝るくらいである。
しかし、男性は不夜城の吉原見物にも出かけたりもした。
- (c) 主婦は、夜明けとともに火を起こして飯を炊き、掃除・洗濯・縫物・子供の世話等で一日を過ごす、時には息抜きで芝居見物等にも出かけた。
飯は火災防止上からも江戸では朝に、上方では昼間に炊いたようである。
- (d) 子供は、朝から午後の2時頃まで寺子屋に行き、男子は読み書き・そろばん、女子は、裁縫・読み書き等を習った（子供の教育には熱心）。
- (e) 風呂は、庶民と下級武士は銭湯を利用した。銭湯は男女混浴であった。
- (f) 旗本・御家人等の武士は役務毎に定められた規則に従って江戸城に登城したが、概ね3日に1日は休みがあった。
役務の無い旗本・御家人は暇で、内職をしたり趣味を楽しんだ。
主な武士の内職：傘・提灯・団扇・凧・虫簞・楊枝作り、鈴虫・コオロギ飼育、金魚の養殖、小鳥の孵化、朝顔栽培、盆栽作り・・・・・・
- (g) 主君が登城する時は、規定に準じた供侍を従えた。
供侍は主君の下城まで城外で待っていた。
- (h) 約220名の大名は、参勤交代により一年ごとに江戸と地元を行き来した。
参勤交代は一種の武装訓練と位置付けられていて、定められた配下を伴わねばならなかった。10万石＝240名、1万石＝55名。
しかし、見栄を張って規定よりも多い配下を伴う大名が多かったようである。
- (i) 参勤交代に伴って上府した勤番武士は、主君が出かける時に同道するくらいで、たいした仕事も無く、ある武士の日記によると六か月の内に47日（26%）しか勤務をしていなかった。

5. 男性中心の消費都市→分業体制→大量生産→食革命

- (1) 食料生産活動の無い男性中心の大消費都市。失業者が少ない。
- (2) 棒手振り売り・屋台（七輪の普及が大きい）による外食産業が発達。

- (3) 自給自足社会→分業体制→大量消費→大量生産制
 - (a) 江戸湾の豊富な魚介類、近郊農家から新鮮な野菜
 - (b) 江戸に近い下総で味噌・醤油等の大量生産が始まる
 - (c) 砂糖も薩摩・土佐等で国産化が始まる
 - (d) 鰹節・昆布等の出汁の技術が向上
 - (e) 酒は灘近郊からの下り物が多かった
 - (f) 酢は酒粕の利用により、三河国、紀州、尾道等で発展した
- (4) 江戸で花開いた日本食
 - (a) 蕎麦（濃口醤油と鰹出汁によって好まれた）：ルチンは毛細管を強化、高血圧予防
鰹：イノシン酸、昆布：グルタミン酸、シイタケ：グワルニ酸
 - (b) 大豆（畑の肉）：高タンパク質、脳の老化防止、成人病予防効果
 - (c) 納豆（僧坊の納所（事務所）で作られた豆加工品）：脳卒中・心筋梗塞予防
 - (d) 豆腐（大豆成分を多く含む）：「腐」＝「府」＋「肉」、「府」＝倉庫、役所等の意味、
「腐」＝肉を保管しておく倉庫、肉を保管しておいたらブヨブヨして軟らかくな
ったことから、豆の軟らかい物の意味で豆腐の字を当てる。
 - (e) 天麩羅：「天」＝天竺から或は揚げるの意、「麩」＝小麦粉のフスマ、「羅」＝うす衣
 - (f) 寿司：古くから魚の保存法として、魚の間に飯を挿んで発酵させた「馴れずし」があ
った。次に飯と魚に酢をあてて発酵時間を短くした鯖寿司・鱒ずしのような「早ず
し」があった。しかし、いずれも作るのには時間を要した。江戸後期に華屋与兵衛
等により、酢飯の握った物に客の要望に応じた魚を乗せる「握りずし」が考え出さ
れた。これが気の短い江戸っ子に好まれて広まった。
 - (g) わさび（山葵）：抗菌効果、認知症予防、老化防止、胃ガン細胞増殖抑制効果
 - (h) 蒲焼：江戸時代初期には、鰻のブツギリを串に刺して焼いていた。この形が蒲の穂に
似ているので「蒲焼」と呼ばれた。江戸時代中期になって裂いて焼くようになった。
 - (i) すき焼き（鋤焼き）：肉を農具の鋤の金属部の上で焼いたのが起源、現在の鉄板焼き。
 - (j) 佃煮：漁業の発達している摂津国佃村の漁師が徳川家康に請われて江戸に出て来て
隅田川河口を造成し佃島と命名して漁業を始めた。
売れ残った小魚の保存法として醤油で煮た物を開発して佃煮とした。
 - (k) 浅草海苔：墨田川では漉き紙が生産されていた。この漉き紙の技術を利用して
海苔が作られるようになった。
- (5) 食文化の発展に伴って、磁器・陶器類の食器も発展
- (6) 人が集まる所には屋台が出て食文化が広がる＝庶民の文化

6. 遊興・娯楽

「宵越しの金は持たぬ」 食べることに次いでよく遊んだ。

- (a) 両国の花火：享保 16 年（1731 年）に起こった大飢饉とコレラの流行で 100 万人以上
の人が亡くなった。これらの慰霊と悪疫退散を願って、翌年 5 月 28 日～8 月 28 日の
間、毎日花火が打ち上げられて大勢の人が出かけて屋台も多く出た。
- (b) 花見：八代将軍・吉宗は、庶民の憩いの場として、春日山・御殿山・隅田川堤等に桜
を植えた（染井吉野、全国的に広がる）。花見と花見弁当が流行る。
- (c) 芝居・歌舞伎：芝居や歌舞伎が人気を呼び、幕の内弁当や助六弁当が生み出された。
歌舞伎は、出雲国の巫女の阿国が京都に出て男役の舞・芝居を始めたのが起源と言わ

れている。女性が男役・男性が女役の踊り・芝居が人気を呼んだ。この形が遊女の顔見世興行にも利用されたので、幕府は女性の舞を禁じて男性だけの芝居となった。

芝居・歌舞伎以外にも、話芸・寄席等も人気を呼び庶民の娯楽熱が高まった。

(d) 盛り場・寺社見物：上野、高輪浜、目黒不動、愛宕山、根津権現、吉原・・・

(e) 寺社参り：富士山詣・大山詣・江ノ島詣・鎌倉・金沢八景・伊勢詣・京都・奈良・金毘羅詣等の信仰を建前とした旅が盛んになった。

特に富士講が人気を呼び、江戸の町には約50の富士塚（富士山を模した小山）が出来た。

(f) 東海道中膝栗毛や広重の街道浮世絵により、旅は盛んになった。

(g) 犬・猫等のペットの他、金魚・小鳥・コオロギ等を飼育することも流行った。

これらの飼育は武士の内職として行われることが多かった。

更に、盆栽も武士の内職として行われて庶民の間にも流行るようになった。

(h) 和歌は貴族・武士のたしなみであったが、庶民の間では俳句・川柳が広まった。

(i) 囲碁・将棋は武士の嗜みであったが、囲碁・将棋も庶民の間に広まった。

7. 参勤交代と文化交流・地方活性化、平和が続く戦わぬ武士

(1) 参勤交代に伴って全国の文化が江戸に入って来て、融合した新たな文化を構築、この新しい文化が再び地方に広がる

(2) 地方大名は財政補助の為に地方名産品を特産品として育成、将軍家への献上品、他大名への贈り物等として広がり、庶民へも普及して行く
(有田焼、萩焼、九谷焼、瀬戸焼、京焼、輪島塗、久留米絨、南部鉄瓶、浅草海苔・・・)

(3) 宿場町にも各地の文化・名産品が伝播して行く

(4) 戦うことを忘れた武士も庶民の仲間入りして、諸々の庶民文化を楽しむようになった。

8. 浮世絵による出版文化と寺子屋のよる識字率の向上（文化水準の向上）

(1) 浮世絵（民衆的風俗画）の多色刷り木版画技術が確立

(2) 風俗画、美人画、役者絵、風景画、植物画・・・・・・・・

(3) 浅草海苔と浮世絵は良い江戸土産物となった。

参勤交代の武士により、江戸の庶民の生活・文化が全国に広がる（PR誌）

(4) 寺子屋により、庶民の識字率が向上して諸々の新しい文化が発展していった（江戸時代末期には、全国に1万以上の寺子屋があった）。

日本文化と言われているものの多くは江戸で花開いた庶民の文化